

# 「公共」を意識した授業実践

## －理論に基づく諸課題の探究－

さいとう だいじゅ  
齋藤 大樹

**抄録：**高等学校では令和4年度より、新科目「公共」が始まる。「公共」においては、倫理的主体として判断するために必要な思想・理論について諸資料を通じて学び、そうして身に付けた思想・理論に基づき現代の諸課題について考察し、自分も他者も納得できる力を身に付けさせることが求められる。本稿はその「公共」についての授業実践の報告である。

**キーワード：**公民教育，新学習指導要領，探究型学習，公共

### 1. はじめに

従来<sup>1</sup>の公民において、倫理は個人や社会が「どうあるべきか」という価値判断の根拠となる思想・理論を扱い、政治経済は社会が「どうあるか」という現実の法・制度を扱ってきた。現代社会はそれらを横断してはいるものの、それぞれを個別の問題として捉えてきた。しかし、新科目である公共においては、倫理と政治経済を内容的に融合し、思想・理論に基づき、現実の法・制度について理解させることが求められるのみならず、倫理や政治経済の枠を超え、現実の法・制度をどのように変えていくべきかという問題について考察することが必要となる。本稿で報告する授業においては、そのような考えの下、「自由」をめぐる種々の思想に基づき、現実<sup>2</sup>に起こっている「コロナ禍における諸課題」を解決するための方法を考察させるということを行った。

### 2. 授業実践の内容

#### (1) 授業の目標

「政治経済」の「現代日本における政治・経済の諸課題の探究」の内容として、現代の諸課題を探究する活動を通して、少子高齢社会における社会保障の充実・安定化，歳入・歳出両面での財政健全化について多面的・多角的に考察することが定められている。本単元においてはこの問題を「公共」における「公共の扉」の視点を取り入れて扱う。

「公共」では、諸資料から倫理的主体として活動するために必要な情報を読み取る力、さらに現代の諸課題について事実を基に概念などを活用して多面的・多角的に考察し、解決に向けて公正に判断する力を身に付けることが目標としてあげられている。これらの目標は特に「公共の扉」において現れている。「公共の扉」で扱う内容の一つとして、諸資料の読解を通じて公正や正義などのよりよい社会を構築するための概念的な枠組みを身に付け、現代の諸課題について考察するというものがあげられる。「概念的な枠組み」を身に付けることが必要であるのは、「自らも他者も共に納得できる解決方法を見いだす」ためであると考えられる。そこで本単元においては、「政治経済」で扱う内容を「公共」の視点を取り入れることで、「諸資料を通じて身に付けた概念的な枠組みに基づき現代の諸課題を考察し、自らも他者も納得できるだけの根拠を持った解決方法を示すことができる力」を育成することを目指す。

#### (2) 授業の内容

本単元で注目した概念は「自由」である。自由について論じた種々の思想家の資料に基づき、リベラリズムとリバタリアニズムという、異なる形で「自由」を実現しようとする「自由主義」が存在していることを理解させる。さらにコロナ禍において現実に議論されている種々の問題について、リベラリズムとリバタリアニズムそれぞれの立場に基づき、他者に対して説得力の持つ解決方法について考察する。

#### (3) 授業計画の概要

##### ① 第1,2時「資料集」を作成する。

思想家の原典（翻訳）を読解し「自由」について考察する。

② 第3時「自由主義」とは何か。

「自由主義」を分類し、リベラリズムとリバタリアニズムについて考察する。

③ 第4-7時 コロナ禍における諸課題の解決方法

それぞれの思想的立場に基づき、現代の諸課題の解決方法について説得力を持って論じられるようにする。

(4) 生徒観・指導観

中学校の公民において、すでに日本国憲法で保障されている人権や、その人権を保障するための法律や制度については学習している。特に本校の場合、中学校三年の公民において学習し、高校一年の政治経済においては、その学習内容を記憶している生徒も多い。ただし、それらの学習内容を現実起こっている社会問題と結び付け、考察できているかという点については疑問もある。特に既存の諸課題、あるいは評価が確定している諸課題（例えば環境問題）については考察できても、今、現実起こっている問題について、意見を言える生徒は少ない。また意見を言える生徒であっても、あくまで「自分の意見」に過ぎず、他者に対して説得力を持って、論じられることができる生徒は極めて稀である。しかし急速に変化していくこれからの社会においては、新たに起こる課題について自分なりに考察し、説得力のある意見を発する力が、政治参加する市民としては必要となるだろう。

そこで、まず主張を裏付ける概念を身に付けさせるために、思想家の原典を読み解き、「資料集」を作成させることで、「自由」について考察させることにする。この考察により、「自由主義」と表され、「自由」を重んじていても、相反する主張をする立場が存在することを理解させる。その後、作成した資料集を利用して、今、現実起こっており、社会の中で意見が分かれている課題、具体的にはコロナ禍における新たな「政策」について考察させ、その政策を根拠づけ、説明できるようにすることをねらいとする。

(5) 評価の観点

① 知識・技能…「自由」についての概念を把握し、その概念と社会問題を結び付けて理解できる。

② 思考・判断と表現…自分の意見について、他者に対し、根拠に基づき、説得力を持って説明できる。

③ 主体的に学ぶ姿勢…議論や発表に積極的に参加し、問題意識をもって取り組んでいる。

(6) 指導計画の詳細

① 「資料集」を作成する。

3,4人グループの10班に分かれ、それぞれ異なる文献の抜粋を読解する。読解は、「文献に書かれている内容の解説」、「その文献から読み取ることができる自由の定義」、「現実の日本において具体化されている制度、仕組み」の三点をまとめ、資料集を作成するという形で行う。

その際、配布する文献は、高校生にとって難解な用語は登場しないが、一読するのみでは理解できない程度のもを選択する。これは、単なる用語の調べ学習となるのを防ぐためである。使用した文献は、例えば、J.S. ミル『自由論』、ロールズ『正義論』、ノージック『国家・アナキー・ユートピア』などである。

またこれらの文献から読み取り、定義された様々な「自由」が、現在の日本に存在する現実の法や制度の中で、どのように生かされているかを考察させる。

② 「自由主義」とは何か。

自分たちで作成した「資料集」を読み、「自由」の概念を分類する。その際に教員は、生徒が作成した資料をスライドとして提示し、作成した生徒たちと質疑を行いながら、コメントを加え、必要があれば修正する。それにより生徒に、文献に基づき、リベラリズムとリバタリアニズムについて、現実に存在する法や制度と結び付けながら異なる「自由主義」について理解させる。

③ コロナ禍における諸課題の解決方法

①とは異なる3,4人グループの10班に分かれ、提示された政策について、思想的な立場を選択し、その立場に基づき、考察し、班ごとにA4一枚程度のレポートとしてまとめ、発表用のスライドを作成する。レポート、発表は「政策の内容や目的」、「自分たちの立場から考えた場合、その政策は正当化できるか」、「その政策を行った際の問題点、あるいはその政策の代替案」の三点にまとめる。

その際の政策とは「国が外出禁止を伴うロックダウンを行う」、「政府が行動追跡を可能にするアプリのダウンロードを義務付ける」、「自治体が新型コロナのワクチンを接種した人に対して特典を提供する」の3つである。このような「模範解答」が存在しない、自分たちに降りかかった問題を向き合うことで、現代の諸課題について考察し、自分も他者も納得させる力を身に付けさせる。

### 3. 生徒の反応・達成できたこと・今後の課題

○肯定的な生徒の反応としては、以下のようなものがあった。

- ・「自由」というと単に「何でもできること」と思っていたけど、自由を実現するため「には色々な立場があることがわかった。
- ・リベラリズムもリバタリアニズムも、結局、程度の問題（政府がどこまで行ってよいかという程度の問題）で、どちらの立場もそれほど違いは無いように感じた。
- ・リベラリズムとリバタリアニズムについて知ることで、選挙の時に色々な政党が言っていることが、よく理解できるようになった気がする。
- ・社会保障を行うべきという人と、減らすべきという人と、どちらの主張にも理由があることがわかった。

○これらの反応から、以下のことは達成できたと考えられる。

- ・自由という概念について、文献に基づき、読み取らせ、理解させる。
- ・学んだ「思想」を現実の事柄に結び付ける。
- ・獲得した知識に基づいて、現代の諸課題について判断する。

○否定的な生徒の反応としては、以下のようなものがあった。

- ・自分の班は「リバタリアニズム＋ロックダウン」を担当したが、ロックダウンは正当化できないという結論になってしまったので、代替の案を考えなければならなくなった。でもそんな案は思いつかないし、高校生が思いつくようなことは、もう大人がやっていると思う。
- ・哲学者の難しい文章を読まされたが、読み方は間違っていたし、後で先生が解説して、訂正されたので、時間をかけて読むことに、意味があるとは思えなかった。

○これらの反応から、以下のことが課題としてあげられる。

- ・模範解答がない問題を考察し、それぞれが異なる問題を担当すると、難易度に差が出てしまう。模範解答がない問題にこだわったが、問題設定が適切ではなかった。
- ・生徒が自分たちで「読解」を行っているときに、どこまで教師が細かく指導をし、訂正していくべきだったのか。最終的に結局「講義」を行ったことによって、自分たちで読解させた意味が薄れたのではないかと主体的な学びと正しい知識をどう両立するか再考すべきである。

### 4. おわりに

諸資料から必要な情報を読み取り、思想や理論を身に付けさせるという目標については、一定程度、達成できたように思える。しかし、情報を読み取る際の主体性と、獲得する知識の確実性をどのように両立していくかという点については課題が残った。また現代の諸課題について考察し、自分も他者も納得する答えを提示するという目標についても、一定程度は達成できつつも、問題設定などが課題として残された。

いずれにしても、「公共」は「今」の社会で起こっている問題を扱う科目である以上、つねにその「問題」は変化し、それに伴い、身に付けなければならない思想や理論も変わり続けることになる。そのような意味では生徒以上に教員が「学び」を続けていかなければならない科目であること、強く自覚する必要があるだろう。

### 5. 参考文献

『詳解倫理資料改訂版』実教出版

『最新政治・経済資料集新版』第一学習社

足立幸男編著『現代政治理論入門—原典で学ぶ15の理論—』、ミネルヴァ書房、1991年